

平成30年度病虫害発生予察予報第6号（9月）

平成30年9月7日
高知県病虫害防除所

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量※
水稻（普通期稲）	いもち病（穂いもち） ごま葉枯病 ツマグロヨコバイ セジロウンカ ヒメトビウンカ トビイロウンカ	<u>多(東)</u> 、やや少(中央、中西、西) <u>多(東、中央、中西)</u> 、平年並(西) <u>多(西)</u> 、 <u>やや多(中央)</u> 、平年並(東、中西) 平年並(中央、中西、西)、少(東) <u>多(中央、中西、西)</u> 、平年並(東) 少(県下全域)
かんきつ類(温州みかん)	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ カメムシ類	<u>多(中央)</u> <u>多(中央)</u> 少(中央) <u>やや多(中央)</u> <u>やや多(中央)</u>
かんきつ類（中晩柑類）	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ カメムシ類	<u>多(西)</u> 、平年並(中西)、少(東、中央) <u>多(中央)</u> 、 <u>やや多(中西)</u> 、やや少(東、西) <u>多(中央)</u> 、平年並(中西)、少(東、西) <u>やや多(東、中央、中西)</u> 、やや少(西) <u>やや多(県下全域)</u>

※ （ ）内の表記 東：県東部、中央：県中央部、中西：県中西部、西：県西部

I 気象予報（高松地方気象台 8 月 30 日発表）

＜予想される向こう 1 か月の天候＞ 9 月 1 日から 9 月 30 日

平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう 1 ヶ月の降水量は、平年並または多い確率ともに 40% です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに 40% です。

週別の気温は、1 週目は、平年並または高い確率ともに 40% です。2 週目は平年並または低い確率ともに 40% です。

＜向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

期間	対象地域	要素	低い(少ない)		平年並	高い(多い)
1 ヶ月	四国地方	気温	40		30	30
		降水量	20	40	40	
		日照時間	40		40	20

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

期間	対象地域	低い	平年並	高い
1 週目	四国地方	20	40	40
2 週目		40	40	20
3～4 週目		40	30	30

＜予報の対象期間＞

1 ヶ月：9 月 1 日（土）～9 月 30 日（日）

1 週目：9 月 1 日（土）～9 月 7 日（金）

2 週目：9 月 8 日（土）～9 月 14 日（金）

3～4 週目：9 月 15 日（土）～9 月 28 日（金）

II 病虫害発生予想

1 水稻（普通期稲）の病虫害

1) いもち病（穂いもち）

予 想 発生量：多(東部)、やや少(中央部、中西部、西部)

根 拠

(1)穂いもちは、8 月の調査では県東部で平年よりも発生が多かったが、その他の地域では少なかった。また、葉いもちは、西部で平年よりも多く、東部平年並、中央部、中西部では少なかった。

(2) 9 月は降水量が平年並もしくは多く、気温は低い確率が高いと予想されており、感染に好適な条件が予想されるため、先月よりも発生が多くなるものと考えられる。

対 策

(1)QoI 剤耐性菌発生を防止するため、使用回数は作期を通じて 1 回とする。

2) ごま葉枯病

予 想 発生量：多(東部、中央部、中西部)、平年並(西部)

根 拠

(1) 8月の調査では県下全域で発生が見られた。発生面積は西部では平年並であったが、他の地域は平年の3倍程度と多かった。発生程度は、中央部、西部は平年以下であったが、東部、中西部はやや高かった。

(2) 9月の気象は、平年よりも気温が低く、降水量が多い確率が高いと予想されており、本病の発生を助長する要因は少なく、現在の状況が続くものと考えられる。

対 策

(1) 穂軸、枝梗に発生すると穂枯れを生じるので、発生の多いほ場では薬剤防除を行う。

3) ツマグロヨコバイ

予 想 発生量：多（西部）、やや多（中央部）、平年並（東部、中西部）

根 拠

(1) 8月の調査では県下全域で発生が見られ、発生面積は県西部で多く、中央部でやや多、その他の地域では平年並で、密度はいずれの地域も平年並以下であった。

(2) 9月の気温は平年よりも低く、降水量は平年並～多めと予想されているため、密度の増加は少ないと考えられる。

対 策

(1) 出穂期から登熟期にかけて密度が高密度になると、実入りが悪化することがあるので注意する。

4) セジロウンカ

予 想 発生量：平年並（中央部、中西部、西部）、少（東部）

根 拠

(1) 8月の調査では県下全域で発生が見られ、発生面積は西部で多かったが、その他の地域は平年以下であった。また、発生程度はいずれの地域も平年以下であった。

(2) セジロウンカはほ場への定着性が低く、出穂期以降はほ場から離脱するため発生は減少すると考えられる。

対 策

(1) 出穂期以降に吸汁されると黒点米に似た被害粒が発生することがあるので、発生に注意し、高密度になった場合には防除する。

5) ヒメトビウンカ

予 想 発生量：多（中央部、中西部、西部）、平年並（東部）

根 拠

(1) 8月の調査では県東部を除き発生面積は平年に比べ多かったが、発生程度は平年並であった。

(2) 9月の気温は平年よりも低め、降水量は平年並～多めと予想されているため、密度の増加は少ないと考えられ、8月と同様の状況が続くと考えられる。

対 策

(1) 本虫による直接被害は少ないが、縞葉枯病を媒介するので発生に注意する。

6) トビイロウンカ

予 想 発生量：少（県下全域）

根 拠

(1) 8月の調査では中西部のごく一部で発生がみられただけで、他県でも目立った

発生は見られていない。

対 策

(1) 株元に寄生するので、防除を行う場合は株元に薬剤が十分かかるようにする。

2 カンキツ（温州みかん）の病害虫

1) そうか病

予 想 発生量：多（中央部）

根 拠

(1) 8月の調査では発生程度は高くないものの、発生面積は多かった。

(2) 9月は、降水量が平年並もしくは多く、気温が低い確率が高いと予想されており、感染に好適な条件が予想されているが、時期的に果実の感染リスクは低く、現在の状況が続くと考えられる。

対 策

(1) 窒素過多が発病を助長するので注意するとともに、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

予 想 発生量：多（中央部）

根 拠

(1) 8月の調査では発生程度は高くないものの、発病面積は多かった。

(2) 9月は、降水量が平年並もしくは多く、気温が低い確率が高いと予想されている。感染に好適な条件が予想されていることから、発生が増加するものと考えられる。

対 策

(1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。

(2) 前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) かいよう病

予 想 発生量：少（中央部）

根 拠

(1) 8月の調査では発生が見られておらず、現在の状況が続くと考えられる。

対 策

(1) 銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢を剪定、除去する。

4) ミカンハダニ

予 想 発生量：やや多（中央部）

根 拠

(1) 8月の調査では発生面積、程度とも平年並であったが、全般的に見られた。

(2) 9月の気温は平年よりも低く、降水量は平年並もしくは多い確率が高いと予想されている。高温期を過ぎミカンハダニの増殖に好適な時期を迎えるため発生は増加すると考えられる。

対 策

(1) 薬剤抵抗性の発達を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

5) カメムシ類

予 想 発生量：やや多（中央部）

根 拠

(1) 8月の調査ではほ場での発生は見られておらず、フェロモントラップへの誘殺数も8月としては少ないが、6半旬の誘殺数は増加傾向である。

(2) 越冬世代の発生量が多く、餌となるスギやヒノキの毬果の量も多いことから、繁殖地での発生量は多いものと考えられる。

対 策

(1) 果樹園周辺の雑木林から飛来してくるので、園内をよく観察して、飛来を確認したら防除する。台風などによる強風の後、果樹園に飛来することもあるので注意する。

3 カンキツ（中晩柑類）の病害虫

1) そうか病

予 想 発生量：多（西部）、平年並（中西部）、少（東部、中央部）

根 拠

(1) 8月の調査では、県中西部、西部で発生が見られた。西部で発生面積が多かったが、発生程度はいずれも平年並であった。

(2) 9月は、降水量が平年並もしくは多く、気温が低い確率が高いと予想されており、感染に好適な条件が予想されているが、時期的に果実の感染リスクは低く、現在の状況が続くと考えられる。

対 策

(1) 窒素過多が発病を助長するので注意するとともに、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

予 想 発生量：多（中央部）、やや多（中西部）、やや少（東部、西部）

根 拠

(1) 8月の調査では県下全域で発生が見られ、県中央部では平年に比べ発生面積が多かったが、発生程度はいずれの地域も平年以下であった。

(2) 9月は、降水量が平年並もしくは多く、気温が低い確率が高いと予想されている。感染に好適な条件が予想されていることから、発生は増加するものと考えられる。

対 策

(1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。

(2) 前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) かいよう病

予 想 発生量：多（中央部）、平年並（中西部）、少（東部、西部）

根 拠

- (1) 8月の調査では県中央部、中西部で発生が見られ、中央部では発生面積が平年より多かったが、発生程度は両地域とも平年並であった。
- (2) 9月は降水量が平年並もしくは多く、気温が低い確率が高いと予想されており、感染に好適な条件が予想されていることや、上旬の台風の影響などで発生は増加するものと考えられる。

対 策

- (1) 銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢を剪定、除去する。

4) ミカンハダニ

予 想 発生量：やや多（東部、中央部、中西部）、やや少（西部）

根 拠

- (1) 8月の調査では県下全域で発生が見られた。発生面積は東部、中央部、中西部で平年並、西部は少なかった。発生程度は中西部でやや高かったが、他の地域は平年以下であった。
- (2) 9月の気温は平年よりも低く、降水量は平年並もしくは多い確率が高いと予想されている。高温期を過ぎミカンハダニの増殖に好適な時期を迎えるため発生は増加すると考えられる。

対 策

- (1) 薬剤抵抗性の発達を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

5) カメムシ類

予 想 発生量：やや多（県下全域）

根 拠

- (1) 8月の調査ではほ場での発生は見られておらず、フェロモントラップへの誘殺数も8月としては少ないが、6半旬の誘殺数は増加傾向である。
- (2) 越冬世代の発生量が多く、餌となるスギやヒノキの毬果の量も多いことから、繁殖地での発生量が多いものと考えられる。

対 策

- (1) 果樹園周辺の雑木林から飛来してくるので、園内をよく観察して、飛来を確認したら防除する。台風などによる強風の後、果樹園に飛来することもあるので注意する。

農作物の病害虫防除のための情報です。お気軽にご利用ください。

病害虫防除所ホームページ（こうち農業ネット）

- ① 病害虫発生予察月報、病害虫発生予察予報
- ② 病害虫発生予察注意報、病害虫発生予察警報、病害虫発生予察特殊報
- ③ 病害虫発生予察技術資料
- ④ 新しく問題となっている病害虫 etc.